

埼玉掃除に学ぶ会・埼玉便教会主催 第5回「被災地に学ぶ会」のご報告

日時 平成24年4月14日(土)
活動場所 石巻市小網倉
天気 曇り 4℃-7℃ やや強い風
参加者 42名 (男性27名・女性15名)
(教員12名・学生等22名・一般8名)

「3.11」から1年あまり。「被災地への関心が急速に下がっているのでは」と危惧していましたが、初めて被災地入りするという中高生だけでも18名を占め、若い世代の「熱く純粋な思い」に、とても心強く感じました。今回も埼玉便は日帰りなので、7時には牡鹿VCに到着し、いつもより1時間以上早い8時半には作業開始、昼食も車内でとり活動時間を確保しました。



0 : 10 八潮高校発
7 : 00 牡鹿VC着
8 : 20 現場着・作業開始
12 : 20 作業終了
13 : 00 現場発・昼食(車内)
14 : 20 石巻・大川小にて追悼
14 : 40 同校発
21 : 15 八潮高校着・解散

【四月の牡鹿半島へ】

相変わらず路肩の崩れたままの峠道を越えて、牡鹿VCには7時に到着。身支度後にVC内にてDVDを視聴しながら震災時の解説をいただきました。震災から1年以上経た今でも、VC内の天井は壊れたまま。経済的支援が十分に届いていないことが伺えます。今回も埼玉便では参加費を徴収し、VC活動用の義捐金として手渡させていただきました。これも「日本を美しくする会」より多大なる援助をいただいているお陰です。

【現場の小網倉】

VCから北に車で15分ほど戻ると小網倉があります。港前の「空き地」には木片や蠣殻、ロープや石など比較的小さな瓦礫が無数に散在していました。大型瓦礫がすべて撤去されているだけに、却って、そこに何があったかが判然としませんが、現場前の沈下した岸壁から距離を置いて浮かぶ数隻の漁船が、この付近が漁村であったであろうことを教えてくれます。

【作業を規定しすぎない】

8時30分、VCスタッフによるガイダンスの後、作業が始まりました。土嚢袋を手にペアで向かい合い静かに蠣殻を集める人、スコップを手に巨石を掘り出す賑やかなグループ、1人で黙々と作業を進める人。本来ならば「かかわり」や「達成感」、「効率」などを意図して、作業をコントロールするのかもしれませんが、ここ何回か作業に際して心掛けていることは、主催者側で最初から作業を規定しすぎないことです。まずはエリア、グループ、作業内容などをなるべく参加者の自由意思に任せつつ、次第に規定していくのです。これは参加者の意欲を制限しないためであり、特に中高生を中心とした若手が多いためです。こうして1クール45分は瞬く間に過ぎ、休憩になりました。



【1人行方不明の地】

休憩時、現場の向かいに自宅があったという男性から話を聞くことができました。震災時、男性は高台に避難したものの、自分の集落が大津波に飲み込まれていく様子を目撃し、車も船も津波にさらわれたそうです。そして話の中で、現場には個人宅があったこと、この周辺に約40軒の家屋があったこと、15名が亡くなったこと、依然として1名が行方不明であることを我々は知りました。参加者の1人は「あの話の後、ここに骨が交じっているかもしれないと思うと散在する蠣殻の上を歩くにも、とても気を遣いました」と話していました。

45分×4クールを終えた12時20分、瓦礫撤去作業が終了となりました。そして後片付けも終わり、一同少なからずの達成感に包まれているところで、いつも通り集合写真を撮ろうと声を掛けました。その折、VCスタッフより「それは止めてください」と警告を受けました。主催者として、心ない振る舞いに恥じ入りました。慣れと思い上がりをもたらした、最後の「学び」です。

【最後の活動】

昨年10月から5回目となる牡鹿での瓦礫撤去活動も、今回でいよいよ最後となりそうです。復旧でさえもまだまだですが、震災から1年以上が経ち、現地のVCスタッフが不足、運営に手が回らないようです。GWまでには、牡鹿VCは引っ越し、牡鹿半島での瓦礫撤去作業も終了するとのこと。私たちとしては、「次は…」と考えると名案が浮かびません。「牡鹿半島への足が遠退いてしまう」と戸惑うところですが、それ以上に、この決断に至るまでのスタッフの苦悩はいかばかりのものでしょう。牡鹿VCスタッフの皆様、お疲れ様でした。そして心より感謝します。ありがとうございました。

【「次の一步」は…】

昨年10月の「被災地に学ぶ会」以来、200人を超えるたくさんの仲間が被災地を訪れ、たくさんの大切な教えを受けてきました。仲間達はそれぞれの地元に戻り、学校や職場で学びを他人へと伝え「次の一步」や「誰かの一步」へと繋げてくれました。

しかし、今までと同じ手法は使えなくなりました。「長期戦」は当然まだ続きます。ここからです。



最後まで撤去できなかった巨木



撤去された瓦礫と作業後の現場



平成24年4月14日
被災地に学ぶ会（牡鹿半島小網倉）

埼玉掃除に学ぶ会・埼玉便教会
「第五回被災地に学ぶ会」活動報告集

平成二十四年四月十四日(土)
宮城県石巻市牡鹿半島



感想文

会田百花

私は、宮城県石巻市牡鹿半島にボランティアに行きました。今回は、前日の天気予報で雨だったため、泥まみれの作業になるかと思っていましたが、行ってみたら、雨が降ってなくてよかったです。作業内容は、私がやったのは燃えるごみを集めたり、貝殻を集めたりしました。貝殻は小さいものと大きいものが広範囲にあつたため、あまり拾えませんでした。でも、やった所は作業前よりはきれいになったのでよかったです。でも、全部きれいになったわけじゃないので、次につないでいって、きれいになればいいです。また、機会があつたら行きたいと思います。

被災地感想文

下田愛緒衣

私は今回、宮城県石巻市牡鹿半島に被災地ボランティアをしに行きました。前日に雨が降っていて、地面がジメジメしているかと思ひ、少し作業しずらいかと思ひました。でも場所がいい所で、とても作業しやすく、すごく達成感がありました。今回も貝殻や燃えるゴミなどのゴミの仕分けをしました。ゴミの仕分けをする前と後では、かなり綺麗になったのではないかと思います。全てが終わったと言うわけではないので、次に繋げて被災した場所全てが、元に戻れたらいいと思います。もし、また行く機会があれば行きたいなと思います。

八潮高校 志村直樹

今日始めて被災地に行つて思つたのが1年以上たつているのに、思つた以上にゴミがちらかつていました。被災地に行つたきっかけが草間先生に言われて行つてみようと思ひました。もともとボランティアに行つたことがなかつたので、いい経験になりました。やつていてとても楽しかつたけどゴミの分別が大変でした。

被災地の人のためにもたつたし、自分のためにもなりました。日々の生活であたりまえのことも、あたりまえではないことも分かつたし、ゴミを捨てる中で、自分がどれだけ良い環境に恵まれているのかも知りました。なので、これからの生活の中で当たり前のことを当たり前では無いんだと思ひ感謝しながら生きていきたいです。また今回みたいにこういうボランティア活動があつたら積極的に参加していきたいです。

矢野 勇輝

今日のゴミ取り作業のときに大きな石や木が何個も土に埋まつているのを見て、津波がこれらを運んできたのにびっくりしました。災害によつてなくなつた建物などが早く戻つて当たり前のことができるように支えていきたいと思ひます。

「ボランティアに参加して」

小倉 賢樹

今回初めてボランティアに参加させていただきました。

バスで目的地に向かっていく途中、景色が一変する所がありました。景色が一変する所まではコンビニやお店などが並び、普通の街でした。けど突然ある境目から荒れた大地が広がっていました。形だけになっている家、一部が津波によりもぎ取られている家などが転々とありテレビなどで見た景色より言葉に表せない状態でした。

半日作業をしてまだ完璧に元通りの街にするのに数年、数十年かかると実感しました。家一軒分のスペースの瓦礫分けを、半日だけではあまり進まず瓦礫はどんどん集まっていきましたが景色はあまり変わらずでした。

今回ボランティアに参加し改めて感じた事は、1人1人が少しでも被災地の方々の為に行動をしていかなければならないと感じました。

戸塚 純

今回の被災地へのボランティアは、改めて3月11日の地震の威力を感じました。自分たちがあの地震を受けていたらどうなっていたか想像するだけで怖いのです。今回のボランティアを、今回だけでなくこれからのボランティアに繋げていきたいと思いました。

沢田 香織

私は被災地に行ってみて、一年経った今でもまだまだ復興していないという現状を目の当たりにしました。

津波によって流されてしまった巨大なモニユメントが未だに道路にあったり、地盤沈下によって本来水がない場所に水が浸水してきてしまったりと、風化されはじめテレビで報道されなくなってしまうことなど、自ら被災地に足を運ばないとわからない事があるなど改めて実感しました。

このボランティアを機に再び何か自分でもできることを考え行動していきたいと思います。

岩田 千尋

初めてボランティアに参加してみて、自分がたった4時間やった瓦礫撤去あの状態にするまでどれだけの時間と労力が費やされてきたのだろうと考えさせられました。どこがゴールなのかわかりませんが自分で動くことの大切さを学べたのこれからも被災地復興に協力していきたいです。

倉持 優桂里

正直、もう1年経ったし復興に近い状態なのかなって思ったけど予想以上に何もなくて驚いたし、あまりにもほかの地域と違すぎて津波がこんなに怖いものなんだと思いき知らされました。募金をするだけじゃなくて自分から実際に行ってみて手伝ったりすることが大事だなと思いました。

小澤 和真

今回、被災地にボランティアに行かせてもらって、津波の恐ろしさや被災地の悲惨さを改めて強く感じました。

まだ復興には時間や力があると思いますが、日本が協力し合い僕たちも大きな支援を1回するのではなく、小さい支援を長くしていく事が大切だと感じました。

木済 慶太

牡鹿半島で瓦礫撤去をさせていただくのは今回で4回目でした。前回に引き続き天候に恵まれ、快適な作業環境であることに感謝の念が湧いたのですが、ボランティアセンターの方から、今まで身銭を切って活動してきたが、もはや切る自腹も無くなってしまったとのお話をお聞きしました。

自分がいかに恵まれた環境で生活させていただいているかということに改めて気付いたのと同時に、被災地の復興が叶う日まで、必死で戦い続ける人々がいるということを忘れずに、自分にできることを続けていかなければならないと強く思いました。この被災地に学ぶ会は5・6月の活動見込みが立たないとのことでした。このまま仕方が無いでは終わらせられませんが、自分にはどんな実践ができるのか、試されているという思いで、真剣に考えていきたいと思えます。

後悔をしないために

湊 泰将

牡鹿半島でのがれき撤去は今回が最後になりそうだということを知り、帰りのバスで知りました。今年のGWを目前に、牡鹿のVCもその役目を終えてしまうとのことでした。4月14日、あの大震災から400日目。この40日間、私が現地でのがれき撤去をすることができたのは3回だけでした。先月にも埼玉便教会による「第4回被災地に学ぶ会」が行われましたが、仕事（当直勤務）により参加できませんでした。今回も翌日の4月15日が当直勤務だったため、当初は参加することを見送ろうかと考えていました。金曜日の深夜に集合して、バスで往復して、土曜日の夜に解散という日程です。睡眠不足などの懸念が頭をよぎってしまいました。しかし、行かないで当直勤務することがなくて後悔するくらいだったら、行ったことで次の日疲れても、それが自分の経験になるからと、行くことを決意しました。前回参加したのが約5か月前で、その日以来いつ行ってもいいように、と押入れにまとめていた荷物を出し、金曜日を迎えました。やはり往復の車内では

なかなか寝付けず、石巻市内に着いたときはまだ頭がぼんやりしていました。しかし、牡鹿半島へ向かう車内で見たDVDと、現地のVCで見させていただいた映像で、気持ちは完全に切り替わっていました。VCからさらに10分少々バスに揺られ、現地に到着しましたが、すでに重機等で大きながれきを撤去した後ということもあり、遠目からは一見片付いているように見えました。しかし実際に足を踏み入れてみると細かな貝殻やビン、レンガの割れた破片や木片などが地面を覆っていました。ここに来るまでに見てきた港や町も一見片付いているように見えて、実はこういう状態であったのではないかとすると、東北の各地からあの忌々しい大震災の落し物を完全に撤去するにはあとどれくらいの日々がかかってしまうのだろうか、それこそ今年中にできるもののだろうか。そんな気持ちになっただけです。でも、今できることはこの場所をきれいにすることだと思いい、作業にあたりました。流れ着いたと思われる巨石や木の幹、そして元々の地に立っていたであろう住居の基礎から飛び出してむき出しのままの鉄骨など、あの日を連想させるものを中心に片付けていきたい気持ちのままに作業していたため、結果的に重量物を相手にすることとなり、翌日は仕事だというのに筋肉痛になってしまいました。今回も思ったほどきれいにすることができず、心残りのまま現地を後にすることになりましたが、そこで突然、牡鹿半島での「被災地に学ぶ会」は今回で最後かもしれないと、村田先生から言われました。VCの運営も誰かがそれをしてくださっているから、このような活動をすることができると。そのことを再認識した瞬間でもありました。ただ、東北の各地が震災前までの、あるいは震災前よりも活気のある街になるまで、がれき撤去という形ではなくても何かを続けることで、ささやかながらも力になりたい、そんな気持ちで芽ばえました。今回参加しなかったら今頃はきっと後悔していたことでしょう。「できることをしなかったがために後悔する、なんてことはしたくない。」

いつの日かに心に決めたことが実現できていると感じることができた会でもありました。

翌日曜日には寝不足と筋肉痛でしたが、職場の生徒たちにも今の被災地の現状を話すことができました。「どうして行ったのですか」と質問してきた生徒も何人かいました。あの日を日本で過ごし、そして自由に動ける身体を持ち、たまたま休みの日に、被災地に行くバスパックを計画してくださった方から案内のメールをいただいた。そんな答えをしたからか、反応はさまざまでした。でも「力になりたい」と思っただけでどんな力になれるかはわかりません。なので、その日その日の「できること」をしたいと思います。

このバスパックを計画してくださった村田先生と出会うことができたのは掃除の会を通してある青年と出会うことができたからです。今回も資金面で多大な援助をしていたのですが、それよりも大きな、人と人とのつながりというものを、日本を美しくする会からサポートしていただきました。掃除を通して人との絆が生まれ、それが日本を美しくしていくことにつながっているのだと思います。

「被災地に学ぶ会」参加レポート 2012年4月14日

参加者名 倉淵 勝宏
所属 草加市立新栄小学校

何度同じような光景を見ても、同じような経験をして、慣れるということがないものもある、慣れてはいけないものがあるということを感じさせていたいただいた活動だった。

石巻市街地の光景は、前回参加した時と大きく変わらなれど感じた。店舗や住居はすっかり整備され、人々の日常が容易に想像できる。最後の休憩で立ち寄ったコンビニエンスストアも、店内も駐車場もとてもきれいであった。だが、数百メートル先にある大きな堀がなかったら、その場所もどうなっていたか分からないという状況だったそうだ。バスからその堀をみることでできた。そして、その堀より先には大きく異なる光景が広がっていた。同じ宮城県内には、高速道路の盛土高架によって津波がせき止められ、被害を免れた地区もあるという。逆に、高架の反対側では、大きな被害を被ったということだ。ほんの数百メートルの差で、人生が大きく変わってしまったといえる。運が良かったとか悪かったという言葉では決して片付けられない。自分にできることはとても小さいが、せめて、これから向かう場所で全力で働かせていただくことと決意を改めた。

やはり、海に近い場所に行けばいくほど、何度見ても目をそらしたくなる風景が見えてくる。今回作業をさせていただいたのは、まさにそういった場所だった。震災前はきつと、潮風と潮の香りが心地よいところだったのだろう。今でももちろん、海を感じることはできるのだが、周りの状況がそういう感覚を覆い尽くしてしまう。海に浮かぶ何艘もの船は、使われている気配はない。山の中腹に奉られた神社も、直接の波の力によるものか、斜面を削られ、階段が崩れ落ち、心もとない様子で佇んでいる。

住居または作業場と思われる場所の片付け作業をさせていただいた。地面に埋もれた網やテグスから漁業関係の道具の保管場所であったのかと想像したが、もちろん建物はないのはつきりわからないし、周りから流されてきたものであるかもしれない。それにしても相当な量であった。引つ張れば、いくらでも地面から出てくる。まさにきりが無いといった状況だったが、それだけのものに覆いかぶさるほど大量の砂やどろが水と一緒に押し寄せてきたことを意味している。気の遠くなる作業であったが、他の参加者の皆さんと協力しながら順調に進んでいった。高く積みあがった撤去物を見ると、ある一定の成果を上げることができたと感じる。だが、ここに住む人たちは、まだ再出発のスタート地点にも立っていないと感じていることだろう。作業中、地元の方と話をすることができた。せめて元気を届けたいと、明るく接し、相手にもこやかに話をしてくれたが、やはり、表情はどこか物憂げだった。この状況では無理もない。今回の自分たちの作業が、その方をはじめ、地域の皆さんにとって、わずかでもプラスになってくれていることを願うばかりである。

作業後は、相変わらずおいしいクジラの寿司をいただきながら、大川小学校へ向かった。前回参加した時には立ち寄らなかったのが初めての訪問になる。焼香させていただいた後に敷地内をまわってみた。校舎の二階と体育館を結ぶ渡り廊下がなぎ倒されていた。学校からは堤防で川面は見えずそれを乗り越えて大波がやってくることを想定するのは難しいことだったかもしれない。ここで亡くなった子どもたちが感じた恐怖や、教え子を守れなかったと自分を責める先生方の無念を思うと胸が痛む。

震災から1年以上たっても、まだまだ復興の兆しすら見えない場所が多いことを、今回の学ぶ会で改めて知らされた。私たちは、テレビの映像で見たとしても、現地ですら触れたとしても、この惨状に慣れてしまっただけではない。この光景が過去のものになるまで、歩みを止めてはいけなさと感

じた。

「被災地に学ぶ会」に参加して

加藤千晶

「被災地に学ぶ会」には2回目の参加です。前回、初めて目にした被災地の現状に私はとても衝撃を受けました。石巻市内に入り、同じ道を通り同じ景色を見たとき、思いがけず涙があふれました。悲しいのか、悔しいのか、自分でもどうして涙が出たのかわかりません。以前に一度見た光景なので、前回のような衝撃は受けないだろうと思っていました。でも、再び訪れた被災地の景色に私の心がまた震えました。震災から1年以上たっても、ポツンと残るボロボロの家に、積み上げられた車に、ここに住んでいた皆さんの人の思いが詰まっているように見えました。

牡鹿半島に到着し、ボランティア約40名で狭い範囲ながらも小さな瓦礫をコツコツと拾い、分別する作業を続けました。黙々と作業しても、自分を通ったところを振り返れば全然きれいになっておらず、複雑な気持ちになりました。「この小さな瓦礫一つも、誰かが拾わなければ片付かないものなんだから」と何度も自分に言い聞かせましたが、「拾っても拾っても、全然片付かない」という焦りや、「こんなんで本当に被災地の復興の力になれるのかなあ」という不安を拭うことができませんでした。

そんな気持ちを抱えている中、私たちの作業しているすぐ横、海沿いの道を時折、数台の車が通り過ぎていきました。一台の軽トラックが通りすぎるとき、運転手のおじさんがこちらを見ていることに気が付きました。宮

城ナンバーだったので、おそらく現地の人だったと思います。おじさんにはっこり笑って私たちを見ていました。その笑顔を見たとき、寒さも疲れも全て吹き飛んで、「ここに来てよかった」と思いました。もしも私たちの活動で誰かがほんの少しでも笑顔になれたなら、それだけで来た意味はあると思います。また、おじさんの笑顔で私自身が元気をもらい励まされました。被災地への支援を考えたとき、ついこちらが何かを「あげる」側だと考えていました。だからこそ、以前の私は「支援するための技術など」何もあげるものがない」ことを理由に被災地に足を踏み入れることを戸惑っていたんだと思います。でも実際に行ってみて感じたのは、私たちが行くことは何かを「あげる」ためではないのかもしれないということです。おじさんの笑顔に私が逆に励まされたように、私たちが教えてもらったり励まされるのがたくさんありました。被災地に足を運ぶことは、何かをあげに行くのではなく、そこにいる人と力を合わせることかもしれません。うまく説明できないけれど、「あげる・もらう」の関係ではなく、お互いに元気を分け合ったり、支え合う関係だと思っています。

折れ曲がったガードレールや粉々になったブロック塀を見る度に、自然災害の恐ろしさやとてつもない力の大きさに圧倒されました。自然の力と比べたら、人の力なんて本当に小さいものだと思います。でもその代わりに、人はみんなで力を合わせることができます。今回のバスバックに参加した約40人の仲間と力を合わせて活動した経験は私にとって財産になりました。速度は遅くても、みんなで力を合わせれば前に進むことはできるんだと思いました。

また、再び訪れた大川小には、以前には無かった鯉のぼりが飾られています。震災から時間が止まったように悲しみが残る大川小がそこにあるけれど、季節は何事もなかったようにめぐり、移っていく。大川小の校舎を見な

から、あの日大切な家族を亡くした人たちの時間は、どう流れているのかと考えました。止まったままなのか、それとも動き出しているのか。いろんな考え方があると思いますが、私は、大川小で泳ぐ鯉のぼりを見て、どんなに悲しくてつらいことがあっても、ちゃんと未来はあつて、絶望ばかりではなく、希望は残っているんだと感じました。

三月十一日の東日本大震災で、日本は今までにならない被害を受けました。あまりに大きな被害にどう反応していいのかわからず、東京では一時期は自粛ムードが流れました。震災から一年以上がたった今でも「軽々しく震災や被災地のことを話すのは不謹慎だ」というような雰囲気があります。あの震災で家族や友人を失った人のことを考えればその反応は当然かもしれません。でも、みんなが暗い顔のままだったらいままで経つても希望は持てないと思います。ここに住む私たちは確かに本当の意味で震災の怖さを知らないのかもしれないけれど、だからといって震災について語ることを避けていけば、どんどん記憶は風化してしまいます。実際に被災地に行き、復興とは程遠い現状を見て、私たちはまだまだ被災地のことを考えていかなければならないと感じました。でもそれは、悲しみながらも、同情しながらでもありません。この震災を乗り越えることができる、絶対復興できる、私はそう希望を持って被災地のことを考えていきたいです。今回、多くの人のご支援があつて、私は牡鹿半島に行くことができました。だから、その支援を無駄にしないように私はいま私ができることをやります。日本を美しくする会の先生方をはじめ、八潮高校の村田先生やこの「被災地に学ぶ会」にご尽力いただいた皆様には本当に感謝しています。いろんな理由をつけて被災地から目を背けていた私でしたが、皆様のおかげで一步を踏み出すことができました。本当にありがとうございます。

被災地に学ぶ会に参加して 感想レポート

保育士 増渕香

前回の活動の帰り道、「また必ず来たい、来なくてはいけない」と思っていた私は、今回の活動への参加も心に決めていた。前回から一カ月も経たずにまた被災地で活動できることはとてもありがたかった。

続けること、そして繋げていくことが大切だと教えていただき、実際に自分でもそう思っていたのだが、知り合いを誘うにあたってまだ踏ん切りがつかない自分がいた。もちろん前回参加して得られたものは多く、周りの人にも勧めたい想いはある。しかし、たった一回参加しただけで、経験者ぶるのはいかなるものか。自分もまだまだ手さぐりの段階なのに、周りに広げる責任をとれるのだろうか。断られたら嫌だな…。

結局ほとんど声をかけられず、活動を広げられなかった自分を情けなく思いつつ、今回で自分に自信をつけたいとも思った。敢えて知り合いがいないう状況で活動してみよう、それができれば本物だ、と。(本物も偽物もないが)

大学の部活の同期の加藤と一緒に集合場所に向かった前回とは、比べ物にならないほどの不安と緊張感をもってバスに乗り込んだのだが、そのバスに加藤が乗っていた事には心底驚いた。「一人でも…という決意があつたのは確かだが、知り合いがいるという安心感で肩の力が抜けた。やっぱり加藤がいてくれてよかった。

今回も活動はがれきの撤去で、前回と作業内容は似ていた。気温は低か

ったが、地面のぬかるみはなく、作業範囲も途中からかなり狭くなり、集中して取り組むことができたと思う。

休憩中、近所に住んでいる被災者の方のお話を聞くことができ、「遠くからご苦労様。気を付けて：。」というメッセージをいただいた。励まそうというわけではないが、何かできないかと思っただけで被災地で、被災者の方に温かい言葉をいただいた。その心の広さと言うか、懐の深さを感じると共に、何だか複雑な気持ちになった。私は何がしくてここにいるのだろうか。この方に喜んで欲しいから？自分のため？

震災前に作業地に住んでいたご家族は、仙台市内に引越されたとのこと。それを聞いてずいぶんと心が楽になった。命は無事なんだと。今考えれば、作業地に埋まっていたものがすべてのご家族のものとは限らないし、命が助かったからと言って、簡単に「良かった」と思うのは浅はかなことだと思う。しかし、現地に行くかどうかでも思いを巡らせて悲観的な気持ちになってしまふ。津波で家が流され、住み慣れた地を離れることになってしまったのに、それでもこの地の主が生きている、というだけでほっとしている自分。

亡くなった方、未だに行方が分からないままの方もいらっしやるとのことだったが、もし作業地に住んでいた方が無事でなかったら：。私の作業態度や気持ちの入れ方は変わっていたのではないか。

前回はまずは参加すること、一歩目を踏み出すことが大事なんだと実感したが、二歩目、三歩目をどう歩いていくか、どう深めていくかももちろん重要で、もしかしたらずつと難しいのかもしれないと思った。いい意味でも悪い意味でも、慣れを感じてしまっている部分があったのは否めない。

最後の休憩に向かう途中、大きな穴の中に大きな岩と大木が埋まっているのを見た。こんな大きな岩や木がどうしてこの場所にあるのか。津波の威力にぞつとせずにはいられない。岩を拾い上げるためには、まず大木

を取り除かなければならないとのこと。私でも力になれることはありませんか、と声をかけると、「一緒に取りましょう」と快く受け入れてくれた。しかし、大木の周りを掘り進めていくと、大木の上にまた別の大きな青い岩が重なっていた。一つの問題を解決するには、いくつもの複雑に絡み合った原因に丁寧に対応していかなければならない。何だかいろいろな状況を象徴しているようだと思った。

それでも、体力が残っている人はシャベルで土を削り、別の誰かが出てきたがれきを分別して運ぶ。岩を砕いてはどうかと石をぶつけてみる人。物理的な知識がある人がロープや鉄パイプを使って、てこの原理を試そうとする。ロープの結び方に詳しい人が簡単に外れないようにロープを結ぶ周りの人にも声をかけて、大勢で掛け声を出し、タイミングと気持ちを合わせてロープを引く。

それぞれがどうしたらいいかを考え、今できることを必死になってやってみる。初対面で名前もわからない人もいたが、純粋な気持ちでみんなが「協力」していたのではないかと思う。

結局、岩も大木も取り除くことはできなかった。しかし、一体感を味わえてよかったと思うことは、勝手な自己満足なのだろうか。不謹慎なことなのだろうか。ボランティアアセンターの方の言葉が胸に刺さる。

「ここはそういう場所ではない」

自分の納得できる答えを出すには、まだ経験と勇気が足りないように思う

今回は、前回とは違う意味で、いろいろな事を考えさせられた。でも、積み上げられたがれきの山を思うと、作業地がほんの少しかもしれないが、きれいになったことは紛れもない事実であり、活動の意味は確かにある。私がいちいちと想いを巡らせて、あれこれと悩んでいることも、何らかの意味があり、これからの繋げていけるだろうか。いや、繋げていかなければ

ならない、と思っっている。

バスパックの企画、運営に携わってくださった方々、村田先生、一緒に作業をしたみなさん、ボランティアセンターの方々、バスの運転手さん：皆さんに感謝します。ありがとうございました。

『第5回被災地に学ぶ会』に参加して

埼玉県立熊谷特別支援学校 教諭 中村賢一

新年度が始まって日々慌ただしい毎日を送っていた。4月13日（金）も19：30過ぎまで学校にいた。家に帰宅したのが20：00過ぎ、それから夕食、40分程の仮眠を取って22：15頃家を出発、八潮高校へ。何か自分自身をしっかり見つけ直さぬまま過ぎ去ろうとしていた日々の中で貴重な1日となった。

今回も宮城県牡鹿半島での活動となった。ボランティアセンターも私が4ヶ月程前におじやました時と雰囲気が変わった気がする。センターの職員も入れ替わったようだ。朝ボランティアセンターに並ぶボランティアの方の数も減った。

今回の活動内容は漁港の元家のあった場所の瓦礫撤去。大きな瓦礫はすでに片付けられていて、その後の細々とした瓦礫を拾って分別し整理する。作業中に骨が三カ所出てきた。未だ行方不明の方もいらっしやる。この地区でもまだ見つかっていない方がいると地元の方からお聞きした。

ボランティアの活動内容も第1回の頃は大きな瓦礫撤去だったが、今回のように小さな瓦礫となり、団体で瓦礫を撤去するような作業は減ってき

ている。ボランティア活動の内容も変わるし、今後この被災地がどう新たに生まれ変わるのかは分からない。

この1年間に5回ボランティアをさせて頂き感じたことは、困っている人がいたら手を貸す、助け合う、お互いの幸せのために。この精神はつないで行かなければならないと強く感じた。

疲れた日々の中での参加となったが、やはり行く元気になった。またやる気になった。不思議なものである。ほぼ24時間がかりで行くが、帰ってくるとやはり行く前より元気になっている。被災地の為に何か役に立てることが出来ればと行って、逆に自分の為にもなっていることに改めて気付かされた。なぜか、今回バス代を出して下さった『日本を美しくする会』の思い、ボランティアバスパックを企画・運営して下さった村田陽先生の思い、バスパックに参加した中学生、高校生から一般の方々の思い、陰ながら支援して下さった方の思いと実際に活動すること、そういった中から何か力が湧いてくるのかもしれない。自分が行けたのも様々な人の支援、援助があるからこそ。そういったことに感謝しつつ、また日々を明るく元気に過ごし、周囲に返して行く。そして皆を幸せにして行く。また大切な学びを得たと思う。

実際に行かないと分からないことがある。実際に行ってこそ分かることがある。実際にやらないと分からないことがある。実際にやってこそ分かることがある。またこのことを人々につなげて、日本を幸せにする者の一人となることを心に誓った。

『被災地に学ぶ会』を企画・運営して下さった村田先生、『日本を美しくする会』、陰ながら応援して下さった方々に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

4月14日災害ボランティア活動

内田一浩

今回で二度目のボランティア活動ですが、行く度にこの災害の大きさを、思い知らされる思いです。しかし災害現場を車で走っていると着実に前に進んでいるのがわかります。先月は山のようにあったスクラブの車や学校の校庭にあった瓦礫が確実に少なくなっています。先月は気が付かなかったのですが、牡鹿半島に入ってからボランティアセンターまでの道のりで、道路に面して何棟か建っている仮設住宅は気が付いたのですが、わき道を入った所にも小さな仮設住宅があり、洗濯物を干している女性を見かけました。この女性のことを考えた時、家族は無事だったのかを考えてしまいます。震災の日の朝、忙しいからと言って、顔も見ずに行ってしまうと言ってしまったたり、または仕事が朝早いので家族の顔を見ずに仕事に出かけてしまったり、と色々考えてしまいます。一緒に居て当たり前の人が居なくなり、あるはずの家を一瞬にして無くなった人のことを考えると、簡単には頑張ってくださいと言う言葉は掛けられません。私はそこでボランティア活動をしていても、数時間後には家族が待っている家に着いて普通に生活が始まります。あの狭く多分部屋の仕切りの壁も薄いであろう仮設住宅に被災者はあと何年住む事になるのでしょうか。今当たり前のことが、とても大切に思われます。被災者の方に掛けられる言葉は見つかりませんが、私たちがボランティア活動をしているのを見て少しでも元氣付けられればと思います。

今回現場へ行く途中、先月作業を行った現場の脇を通過した時、とても綺麗に整備されていた事に感動しました。前回もう少しやれば綺麗になると思う、今回も同じ所にいければと思っていました。もう他の人たちが

が綺麗にしていました。今回も私たちの前に作業をして、今回は私たちが作業をして次の人たちに繋がって行き、少しずつ整備されていくのでしよう。

この感想文を書いていて、このボランティア活動は勿論被災者の方の為なのですが、これは自分の為の活動ではないかと思えました。

4月14日 牡鹿半島ボランティア

佐藤 萌子

私は今回初めて被災地のボランティアに参加しました。

いつもはTVのニュースで、画面越しで見ただけだったけど、実際に生で見えてみて、TVで見ると全然迫力が違っていました。

長い距離なんにもなくて、驚きが隠せませんでした

今回細かな瓦礫の撤去で、最初は地味なことだと思っただけど私が今回やったことは、い方向に繋がられたんだと思いました

次に小学校に行き、学校の中が丸見えで、びっくりしました
見た目、全然学校に見えなかったけど

教室があったりして、話聞いたりしてたら、涙が出てきそうでした

私がやってるブログで、ボランティアのことを書いたら
ネットの友達の子がコメントで

『私も今度行ってみることにしました』

みたいなコメントがあって、嬉しかったです

今回貴重な体験をありがとうございました！

4月14日 牡鹿半島ボランティア

佐藤達也

今回のボランティアは中三の娘と参加させていただきました

いつもと違うルートで牡鹿半島VCに向かうと、津波の被害を受けたであろう車が三台縦積みになされた保管場所を見ました
道路の真ん中に倒れている巨大な広告塔

壊れかけの家屋は大分解体されたような気もしますが、まだまだありました

ちよつと早めにVCに着き被災時のビデオを観て作業場所へ

海沿いの集落の跡地で細かな瓦礫の撤去でした

VCのスタッフの指示を聞き、作業開始

作業自体はそんなにハードなものではありませんでしたが、とにかく冷たい北風で体力が奪われました

今回の参加メンバーは中学生や高校生がとても多く、積極的に作業をしていて素晴らしかったです

昼過ぎには作業を終了し車内で昼食です

美味いお寿司とパンを頂き大川小学校へ向かいました

県外ナンバーの車が何台もきてましたが、献花台と校舎をバックに何枚も写真を撮っている人がバスの中から見えました

子供がまだ見つかからない親御さんの気持ちを考えると悲しくなりました

帰りは渋滞もなく、驚く程の早さで帰ってくる事が出来ました

八潮高校 村田陽

牡鹿のV.Cは連休明けには閉鎖されると聞きました

震災後は石巻市でありながら合併前の体制に戻ったような感じがあるよ

うなので、今後どうなるのか心配です

娘も今回の経験をブログなどで次の人に伝えたようです

凄く良い経験をさせていただきました

『日本を美しくする会』様交通費の援助ありがとうございます

村田先生、毎回の取りまとめお疲れ様です

また誘ってください

出来ることをやりにいきましよう

ありがとうございます。

「借りを返しに」

今回も「日本を美しくする会」から多大なるご支援をいただき、一行42名はたくさんさんの学びを被災地からいただいで、無事戻ってまいりました。毎回毎回、新しい気付き、深い学びと力をいただいでいます。「いただき過ぎた分」を返しに行くぞと思つていても、結局帰りのバスでは、「またいただき過ぎてしまった」ということを繰り返しております。被災地からの「借り」はますます大きくなる一方です。

「被災地に学ぶ会」を通しての学びの一つは、「自分が無力である」ということと「無力だけれど、与えられた条件の中ですべきことはある」ということです。また「たとえ小さくとも歩き続けていれば、つなぎ続けていれば、前へ進める」ということや「ひとりの人の『今』というものが、いかに多くの条件に支えられて成り立っているか」を実感できたことも大きな学びです。さらにこれも大きな気付きですが、中高生は「大人が失ってしまった何か」を秘めているようです。崇高とも評すべき「純真さ」や感受性の高さは、毎回学ぶことだらけです。ある中学生が感想文に書いてくれた、「精一杯生きていきたい」という言葉は忘れることができません。普段、学校現場で彼らと接していても、私の錆ついた感性では、彼らのところに到底触れることは出来そうもありません。せめて彼らが、自分の中に既に秘められている「宝もの」に気付けるよう、チャンスを作ったり言葉を投げたり、「無力」の立場から実践していくのみです。

「被災地」という場をお借りして、人としての生き方をこれからも学ばせていただきます。いつも大きな力を貸して下さる皆様、本当に有難うございます。

0泊3日の弾丸災害ボランティア報告（パート2）

寄居町立折原小学校 堀口芳嗣

1 はじめに

『君が大人になった時、後の世代から必ず問われるだろう。「あのころ、どうしていたの」と。関係なく生きていたよと君は答えるだろうか。東北の海で感じたこと、考えたことを自分自身の生き方に反映させなさい。次の世代へ、次の世代へと語り継いでいきなさい。これは君たちの義務なのだから。』

この文は、今年3月6日の朝日新聞に掲載された立教新座中学・高校校長 渡辺憲司さんの文章です。

4月は教員にとって多忙な時間です。同僚から、なぜこんなに忙しいときに震災ボランティアに出かけるのかをと問われました。しかし、私は、その間に対してすぐに答えることができませんでした。私はもしかしたらこの問の答えを見つけるために出かけたのかもしれない。

0から1歩を踏み出すことに時間がかかりましたが、1歩から2歩目を踏み出すのにはわりと簡単にできました。2月25日の震災ボランティアから2ヶ月が経ちました。少しずつですが、石巻の学校の校庭から瓦礫な少なくなってきました。真っ平らな殺伐とした風景の中に真新しいプレハブ住宅がふえ、商売が始まっていました。そんな状況を感じながら汗をかいてきた「0泊3日の弾丸災害ボランティア報告（パート2）」をします。

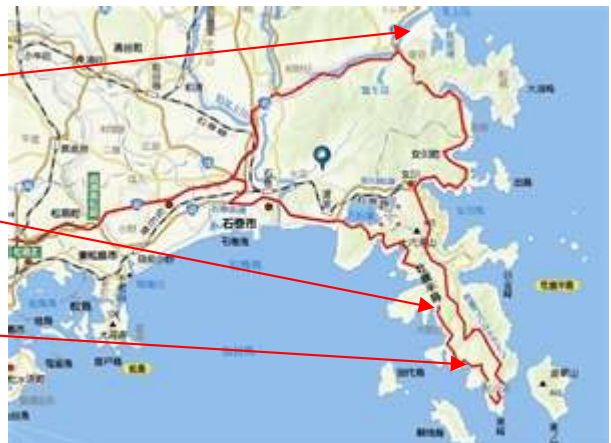
2 当日の日程

4月13日（金）	午後 9時	長瀨出発
	午後 11時	今回の集合地 埼玉県立八潮高校着
4月14日（土）	午前 0時20分	埼玉県立八潮高校発
	午前 8時	宮城県石巻市牡鹿災害ボランティアセンター着
	午前 8時30分	石巻市小網倉湾でのボランティア開始
	午後 12時30分	ボランティア活動終了 (バスの中で昼食)
	午後 3時30分	石巻市立大川小学校にて追悼
	午後 9時30分	埼玉県立八潮高校着
4月15日（日）	午前 0時10分	長瀨着

石巻市立大川小学校

小網倉湾

牡鹿災害ボランティアセンター



3 ボランティア活動を体験して

今回の参加者は、埼玉県内の方を中心に43名でした。今回体験したボランティアは、牡鹿災害ボランティアセンターからバスで30分ほど行った小網倉湾での瓦礫撤去と清掃でした。たくさんの重機が1年間に瓦礫の撤去をしていたようで大きな撤去物はありませんでした。そこで、少しでも地元の方々が元の生活を再建しやすいように心を込めて清掃活動をするという段階でした。

燃えるもの、燃えないもの、貝殻、石などを分別しながらの清掃活動をしていると、確かにそこに人が住んでいたという証をたくさん見つけることができました。鉛筆の芯がしっかり残っているコンパス、寒さを防いでいたであろうマフラー、何かを磨いていただろうと思える紙ヤスリ等々、そして、10センチほどの人骨・・・。

発見するたびに3.11を思い出しました。

50分働いて10分休むという形で作業が進行されていきました。第2クールが終わる頃に私を含めて自然発生的にできた4人組のグループが直面したのは、土の中から突き上がっている長さ2メートルほどの鉄バンセンをどう撤去するかでした。

スコップで掘っていくとブロックの基礎に当たりました。道具がないので石を頭の上から投げおろしブロックを割るという原始的な方法とスコップでの土の取り除きを繰り返して行いました。鉄バンセンが3メートルほど出現したときにはこの先どこまで続くのやらという思いになりました。

私の息子と年齢が同じくらいの少年は、無言で土を掻き出し、鉄バンセンを取り除こうと夢中です。私も負けてはいられません。スコップで土を掻き出します。1時間ほどの格闘後たどりついたのは、そこが風呂場の跡であったということでした。鉄バンセンの撤去は終わったとき4人でハイタッチをしました。無口な少年もにこやかに笑ってハイタッチです。気づくと至る所で仲間の輪ができていてどこでも笑顔で撤去作業をしています。ほんとうに不思議な風景でした。そして、とっても貴重な体験をすることができました。

「一つ拾えば、日本が一つ美しくなる」まさに、鍵山秀三郎先生の言葉通りでした。

4 石巻市立大川小学校から見えてくるもの

東日本大震災で児童70人と教職員9人が死亡し、児童4人と教職員1人が行方不明となった大川小学校にバスが着くと参加者の言葉が無くなりました。校舎はその時の状態のまま、校門に書かれた「大川小学校」の名前のある門扉が特設の慰霊塔となっていました。そこには、多くの人々から捧げられた花束とたくさんの方がたむけたであろう線香の煙がその場の雰囲気を変えていました。「こどもの日」が近づくにつれて亡くなられた方々への想いが更に強くなり、校舎にかけられたたくさんの鯉のぼりは、まるですぐ隣の北上川をゆっくり泳いでいるかのようでした。

校舎の周りは、さすがに1年が経ったのできれいに整地され復興が進んでいることがわかりました。

けれど何もないことがより一層大川小学校の惨劇を私に訴えかけてきました。奇しくも、現在私が勤務する折原小学校の児童数と同じ数の108名と言う数は、何かを私に語りかけているとしか思えないです。自分だったら児童たちに対して何ができたのか。津波が襲ってくるまでの45分間どんな気持ちで108名の児童と避難を考えたのだろうか。

日々の学校の危機管理体制をなおざりにしてはいけないことと同時に、冷静な行動は日常の備えから出てくるものと確信しました。

5 まとめ

東日本大震災では、たくさんのボランティアが現地へ向かっています。表面的には人のために何かをしてあげようという人たちのように見えますが、その内には人を愛し愛されたいという、人間が本来生まれてきた時に持ってきていた純粋な欲求に答えたいという願いがあると思います。

同僚からの「なぜこんなに忙しいときに震災ボランティアに出かけるのか」という問いに対する答えは、自分の心の中で「私は渴いている」という叫びを、自分で癒したかったからだということです。気づかないうちに愛に飢え、心の中で「私は渴いている」と叫んでいたのかもしれませんが、だから、ボランティアが終わり家路についても心の疲れは全くなく潤っていました。

ボランティアとは、自発的に無償で他に奉仕することを意味するものですが、その奥には、「人間は他の命に仕える時に、自分の命が最も輝く」という、命の法則を実践で知ることの意味があると思います。

今回この貴重な体験の場を提供してくださった八潮高校 村田 陽 先生を始め関係者の皆さんに心から素直にありがとうございましたという言葉添えて感謝の気持ちを表したいと思いません。

本当にありがとうございました。